

「小さな親切」運動静岡県本部賞

勇気と知識

静岡市立籠上中学校 一年

大村 弥市



昨年、この作文を書いたらなんと、入賞してしまった。ぼくが書いた『相手を想う』ということが小さな親切の第一歩』という内容を家族全員が知ることとなった。それから、なかなか大変だった。事あるごとに「逆の立場だったらどう思う。」とか「何をすればいいと思う。」とか「有言実行。」とか、家族がぼくの言動をいちいちチェックするようになった。

初めのうちは面倒くさいとか、言われるたびにイライラしていたが、言われるのが嫌だから、先回りして言われないよう心

がけるようになった。そして、逆にぼくが家族に同じような声をかけをすることも何度かあった。ぼくが作文を書いたことで、ぼく自身も家族も『相手を想う』ということのよいきっかけになった。

街に出かけた時のことだ。横断歩道の反対側を白杖を持った男の人が点字ブロックに沿って歩いてきたが、ブロックがマンホールで途切れていて進めなくて困っていた。横には自転車にまたがった高校生がいるが気づいていないし、すぐ車道があっ

て危ない。短い横断歩道なので様子はよくわかったが、目の前の信号は赤なので向こう側がとても遠く感じられ、ぼくはハラハラしながら見ているしかなかった。

「青になったら走っていこう。」

「危なそうなら声をかければいいか。」

信号を待つ間ぼくの中に二つの気持ちが入りまじり、結局：後者。見守ったといえば聞こえはいいが、ただ単にかけ寄って声をかける勇気がなかったただけだ。ぼくがもたもたしている間に、「お手伝いしましょうか。」

と、女の人が声をかけていた。男の人がうなづき何か言葉を交わした後、女の方は男の人と同じ進行方向を向き、一歩前で肘を差し出して自分の腕を持たせた。男の方は安心した様子で横断歩道を渡っていった。

家に帰ってから二人の後ろ姿が思い出され、すぐに声をかければよかったという後悔と、声をかけたとしてもあの女の人のように上手に手伝いができなかっただろうと思う気持ちでモヤモヤしていた。ネットで、目の不自由な人のサポートの仕方を調べたら方法がわかり、次は大丈夫と思えた。知ることとは自信になる。

『想う』ことから親切につなげるには、一歩踏みこんで動かなくてはならないと強く思った。そのために、ぼくにはほんの

少しの勇気と知識が必要だった。今後、困っている人を見かけたら、きっとこの出来事がぼくの背中を押してくれるだろう。小学生の時に掲げた『想う』は、今後家族や友人を巻きこんで継続していく。中学生になったぼくは新たに『動く』を意識して親切の輪を広げていきたい。もう、何もせず背中を見送ることがないように。

